

● ドリーナ バレエ シリーズ〈2〉

はく ちょう

白鳥のように

ジーン=エストリル作／島田三蔵訳



Dolina Ballet Series

●ドリーナ・バレエ シリーズ 2

白鳥のように

N.D.C. 933 266p 18cm

©Sanzô Shimada 1978年

発行 1978年 9 月 初版 1 刷

作者 ジーン・エストリル

訳者 島田三蔵

発行者 今村 広

発行所 偕成社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町 3 - 5 〒162

振替・東京 5 - 1352 番

印刷所 中央精版印刷株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえます。 Printed in Japan.
8397-730020-0904

白鳥のように

ジーン=エストリル・作

島田三蔵・訳



偕成社

DRINA'S DANCING YEAR

Copyright ©1974 by Jean Estoril
Japanese edition published by KAISEI-SHA Co.1978
by arrangement with Kern Associates.

●この物語^{ものがたり}について

未来^{みらい}のバレリーナを夢^{あめ}みるドリーナは、おさないときに両親^{りやうしん}をなくし、祖母^{そふぼ}母^{はは}にひきとられて、いなかの町^{あか}で明^{あか}るい少女^{しょうじょ}時代^{じだい}をすごしました。

やがて、一家^{いっか}はロンドンに引^ひっこすことになり、ドリーナは大きなバレエができなくなりました。なぜかバレエをけぎらいするおばあさんが、ゆるしてくれなかったのです。

しかし、ドリーナの熱意^{ねつい}はすこしずつおばあさんのとざされた心をやわらげ、ふたたびバレエのレッスンをうけられるようになります。そのうえ、たいへんなひみつも知らされました。

さて、いよいよドリーナはあこがれのドミニク・バレエ学校のオーディションをうけることになります。が、ドリーナは、どのように成長^{せいちょう}していくでしょう。



もくじ

第一部 あこがれのバレエ学校

かたみのマスコット	9
不安な日び	25
オーディションの待合室で	48
バレエ・ダンサーへの第一歩	67
ドミニク・バレエ学校	81
クイーンとのいさかい	96
屋根の上からのぞき見	112
おくれるレッスン	130
山上のおどり	150



第二部 未来のバレリーナ？

クリスマス・ショーのうわさ	168
ドリーナの失望	179
すばらしいチャンス	190
バレリーナ志望のバリ娘	201
しばいの初日	214
ホワイト・クリスマス	231
幕がおりる	249
* バレエ用語解説	262
* ロンドンの中心街	264
* 解説	266



筆者紹介

訳者 島田三蔵（しまだ さんぞう）
1938年東京に生まれる。東京教育大学
文学部を卒業後、出版社で児童書の編
集に従事。現在、フリーのライターと
して、児童むけの伝記、翻訳を行なう
住所 練馬区旭ヶ丘2-22 若葉荘3号

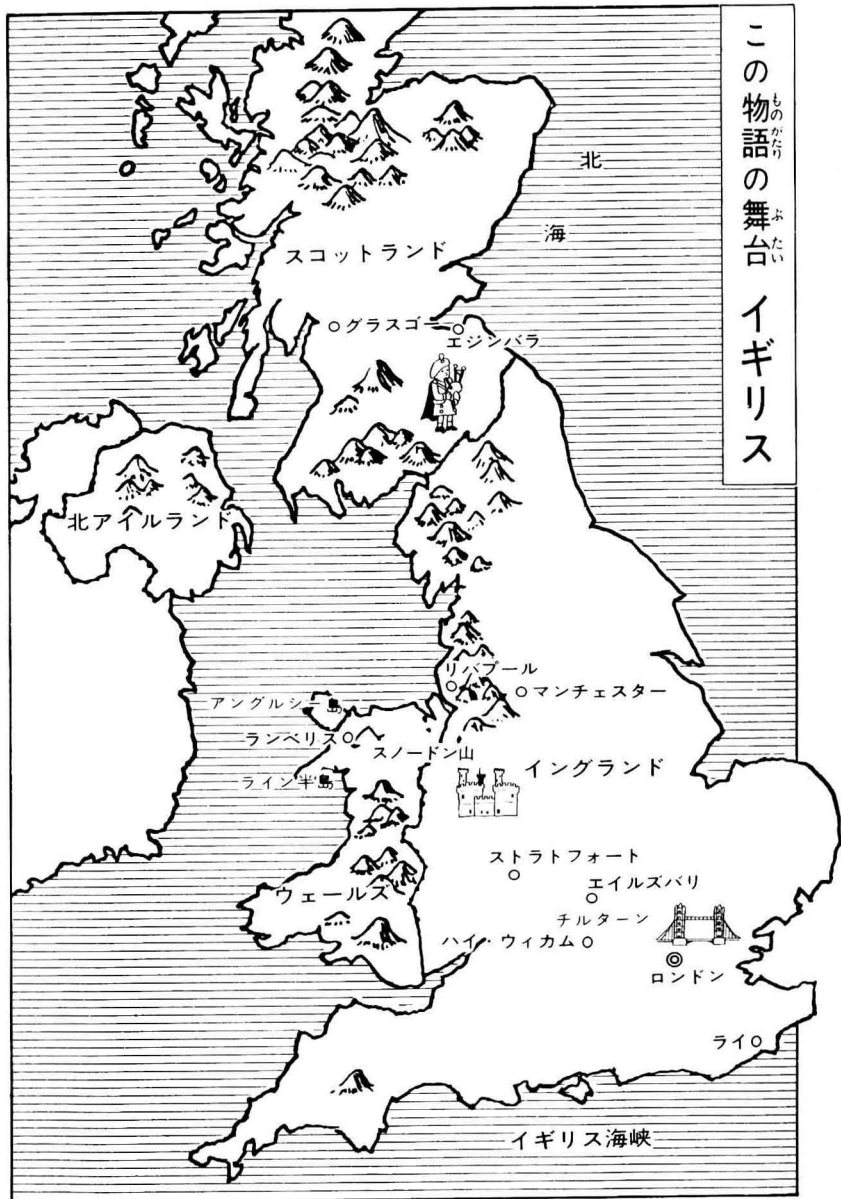
画家 山野辺進（やまのべ すすむ）
1938年満州に生まれる。新聞、週刊誌
の小説や児童書のさし絵、絵本のほか、
単行本、文庫本の装丁など、出版美術
界で活躍。児童物の作品として「祖国
へのマズルカ」「十五少年漂流記」（学
研）「怒りのぶどう」（偕成社）など多数
住所 田無市南町3-15-1

装丁 クリエイション・ハウス

第一部 あこがれのバレエ学校



この物語の舞台 ものごころ イギリス



かたみのマスコット

太陽はきらきらかがやっていたけど、ロンドンはいよいよ寒気につつまれていました。ウエストミンスターのアパートにとまりにきたジェニーは、スツーカーの荷物を取りだすと、すぐに町の見物にいきたがりました。

「あたし、時間をむだにしたくないの。」

ジェニーは金髪の頭に青いぼうしをかぶると、おさげをひとふりして、背中にはねあげました。

「見たいものがたくさんあるんだもの。ねむってるような、古くさいウィラーバリからでくると、なにもかも、すごく刺激的。それから、あんた、話したいニュースもいっぱいあるんじゃない。」

そういうジェニーを、ドリーナはおちつきはらって、見かえました。ふたりはあらゆる点で対照的です。ドリーナは十二歳という年にしては、とても小さかったし、髪の毛もひとみも黒ぐろとしていました。

「ああ、ジェニー！　あまりいろいろなことがあったものだから、どこから話していいかわからないわ。すてきなことばかりよ。あたし、ロンドンが大好き。」

ジェニーは、うかがうような目つきでドリーナを見ました。常識は人なみだったけど、ジェニーはものを見る目にするどころがありました。だから、ドリーナがしあわせで、わくわくしていることがすぐにわかりました。

「あんた、セルズウィック教室をやめて、おじいさんたちとウィラーバリからここに来たころは、ロンドンがすぎだなんて思っていたじゃない。九月にとまりにきたとき、あんたがどんな顔をしてたか、よくおぼえているわ。すべてがもうおわりで、二度とおどりはできないって思ってたじゃない。」

「ええ、そう思ってたわ。」

ドリーナはおだやかにいました。ふたりはへやをでて、エレベーターで下におりました。

「ねえ、ジェニー、あたし、いまではあのころのことは思いたくないわ。おばあちゃんには、おどりをゆるしてくれるつもりはなかったし、ロンドンにはだれも知ってる人がいなかったでしょ、だから、マダムやバレエ教室のみんなや——あんたにあえなくなつて、とてもさみしかったのよ。」

ジェニーは、しばらくだまりこんでいました。このとき、ふたりはミルバンク通りにでて、車の流れがとだえたら、ピクトリア・タワー公園や国会議事堂のあるほうへわたろうと待っていたのです。やがて、ジェニーが顔をあげて、空気のおいをかぎました。

「テムズ川のおいがするわ。こんなにちかくに住すむなんて、すごく刺し激げき的てきじゃない。あら、ビツグ・ベンよ！ あたしみたいに、おとなになつたら百ひやく姓しょう女おんなになりたいと思おもつてるような人にん間げんはべつだけど、これじゃあ、だれだつてウオーリックシャすーに住すみたいなんて思おもわないわね。ロンドンてんごくは天国てんごくだわ。」

ジェニーはドリーナの腕うでをとり、ウエストミンスター橋ばしとビクトリア・エンバンクメントにむかつて、足あし早はやに歩いていきました。お天気はよかつたけれど、寒さむさがとてもきびしかったので、長いことのんびりと歩あるいているわけにはいきませんでした。

「おきたことをぜんぶ話わして。べつに手紙はもらわなかつたけど、なにかあつたにちがいないと思おもつていたの。あんた、おじいさまたちにないしよでホワイトウェイさんのところで練れん習しゅうしていたでしょ、あたし、ほんとうにすごく心しん配ぱいしてたのよ。そのうちひみつがばれて、なにもかも知しれてしまうことは目に見えていたもの。」

「ひみつはばれちゃったわ。アーミー・アンド・ネービー百ひゃく貨か店てんで、おばあちゃんがホワイトウェイさんとばつたり顔をあわせてしまったの。あたし、これは大さわぎになるなつて思おもつたの。だけど、おばあちゃんは最さい初しよ、すごくへんな顔かおをしてたけど、さわぎはおこさなかつたわ。そのとき、おばあちゃんが、あたしたちに、おかあさんがバレエ・ダンサーだつたことを話わしてくれたの。そ

れから、あたしをバレエ・ダンサーにはしたくないって、ずっと思っていたけど、自分の考えがまちがっていたと思いはじめているって、いったわ。でも、このことは手紙に書けなかったの。あなたには、ちゃんとあつて話さなければいけないもの。」

「おばあさまがゆるさなければならなくなることは、あたし、ずっとまえからわかっていたわ。」
ジェニーがりこうぶつていました。

「いつか、あんたはバレエをするために生まれてきたんだって、あたし、いったことがあつたわね。おかあさまがバレエ・ダンサーだったことだって、あたしたち、ずっとそう思ってたじゃない。」

ドリーナの大きな、黒いひとみがかがやいていました。

「だけど、あたしたち、おかあさんは三流のバレエ団にいたにちがいないって思ってたじゃない？ そのときは、おばあちゃん、あまりくわしく話してくれなかったの。あとで話すといったけどね。それから大晦日の晩に、おばあちゃんとロイヤル・バレエ団を見に、コベント・ガーデンにいったの。そして——ああ、ジェニー！ あの晩こそ、あたしの生涯でいちばんすばらしい夜だったのよ。幕あいに、コリン・アンバー・ダウンさんにあつたの。バレエの本を書いている人で、イゴール・ドミニコ・バレエ団となにか関係があるの——といっても、どんな関係かぜんぜん知らないけど。その人が、なんとエリザベス・アイポリーが、あたしのおかあさんだっていったのよ。」

この信じがたいニュースを耳にしてから、すでに四日もたっていたのに、ドリーナはいまだに信じられない奇跡のように、話しました。

ジェニーのおかあさんは、バレエに熱烈な思いをよせていて、以前は娘をダンサーにしたいとのもんでいました。ジェニーは、ウィラーバリのセルズウィック教室に二、三学期かよってみましたが、そのあげく、自分にはダンサーになる気持ちはぜんぜんないし、才能もないことをはっきり知りました。ジェニーがすぎだったのはいなかだし、農業に関心をもっていたのです。でも、そんなわけで、ジェニーはおかあさんから、バレエの世界のことはいろいろきいていたから、偉大なバレエ・ダンサーだったエリザベス・アイボリーの名まえならよく知っていました。アイボリーは、いくつかの点で古今最高のダンサーといわれた人ですが、若くして、悲劇的な死をとげてしまったのです。

ジェニーは、ビクトリア・エンパンクメントの入り口で、ぼうぜんと立ちすくんでしまいました。テムズ川をゆきかう船の姿も目にはいりません。この信じられない、といったジェニーのおどろきを見て、ドリーナは満足でした。自分自身の思いを、ジェニーの顔に見たからです。

「ドリーナだったら、そんな、うそでしょ！ アイボリーがあんたのおかあさんだなんて！ それじゃ、いったいどうして、チェスターさん、いや、あんたのおばあさまが、話してくれなかったの？」

「おばあちゃんは、そんなことがみんなきらいだったからよ。もともとおかあさんにだっておどりをさせたくなかったの。だけど、おかあさんはきかなかったのよ。ならいはじめると、数年間はほかのことをする時間もなくて、ただ練習ひとすじでしょ。それがすぎると、すごく有名になってしまつて、おばあちゃんたちはめつたに娘とあえなくなつてしまつたのよ。いつも旅行ばかりでしょ。ロンドンにいたときだつて、やれ舞台げいこ、やれ練習、やれ公演といった生活ですもんね。だから、おばあちゃんはいまだに、おかあさんはバレエのために死んだという思いをすてきれないでいるんだつて。おかあさんは、あんたも知つてると思うけど、ゲスト・バレリーナとして、ニューヨークでおどるために飛行機にのり、墜落して死んだの。」

「おばあさまが後悔なさる気持ちにはわかるわ。でも、あんたにだまつていたのは、よくないわ。知らせるべきよ。たいへんよ！　うちのおかあさんがこのことを知つたら、なんていうかしら？　まあえまからあんたの素質をみとめていたんだもの。」

「おかあさんがアイボリーだったからつて、あたしのおどりがもつとじょうずになるわけじゃないわ。」

ドリーナは、おちつきはらつていいました。

「まあ——そうかしら。自分のおかあさんがアイボリーだとわかつたのよ、それだけでも、ちが

がでてくるはずじゃない？」

「どうしてちがいがでてくるはずなの、わからないわ。いずれにしろ、何年も何年もきびしい練習をしなけりやならないことにかわりはないもの。いまじゃ、おばあちゃんはおどりをさせてくれるつもりになっているわ。でも、おばあちゃんにしろ、おじいちゃんにしろ、心からそうさせたいと思っているんじゃないくて、あたしのおどりたいという熱意が心底わかったからなのよ。おばあちゃんは、ダンサーの生活はほんとうの生活じゃないっていうの。あたしに、たのしみごとやらないやら、いろんなことに時間をさいてもらいたいって思っているのよ。」

「それで、あんた、バレエひとすじの生活こそ、自分ののぞんでいる生活だっていったんでしょ？ だけど、あたしはおばあさまのほうが正しいと思うわ。あたしなら、ごみごみしたバレエ学校や劇場にとじこめられているよりは、おもてでのびのびした生活をするほうがいいな。あたしとつきあったことが、結果としてあんたにすぐ役だったということになるかもしれないわね。あたし、ずっとあんたのうしろについているから、いつでも農場にとまりにすればいいわ。あんたが、はてしない、ばかばかしい練習のことしか知らない、はんばな人間になってほしくないもの。」

ドリーナはわらいましたが、声がすこしふるえていました。クリスマス後の数日間、とてもたくさんのことがおきたので、まだなにかにつけて感情がたかぶりがちだったのです。